

「歴史スポット」

有吉佐和子と杉並（その2）



2014年12月2日撮影
有吉玉青さん

12月2日（火）再び杉並区立郷土博物館を訪れました。たまたまの縁で、有吉玉青（たまお）さん（大阪芸術大学教授）にインタビューすることが出来ました。初めてお会いしたとは思えないほど親しく接して頂き、まるでお友達になったような錯覚に陥りました。インタビューの内容は『恍惚の人』に的を絞り書かせていただきます。私：『恍惚の人』のモデルは、ご近所の方ですか？

玉青さん：そういうお話は聞いていません。モデルがいたかどうかはわからないのです。

私：その舞台となった梅里敬老会館にお母様が取材したとき、一緒に行かれたことがありますか？

玉青さん：ええ、あります。どんなことを話していたのかは、覚えていないのですが。（これについては、杉並区立郷土博物館発行の冊子「有吉佐和子 歿後30年記念特別展」に「小学校二年生の頃、母と歩いて敬老会館に行った。夕方だった、と思う。もうその会館はなくなってしまったが、職員の方のお話を熱心にメモしていた母の姿をはっきりと覚えている。」と玉青さんが寄稿されています。）

私は、このあと敬老会館がどこにあったのかが気になり、いろいろ探しているうちに、梅里児童公園に何かの碑があったことを思い出しました。行ってみると、その碑には「…ここにあった建物は、大正十年に西武軌道の変電所として建てられ、当時としては珍しいコンクリート造りでした。…昭和38年の（都電）廃止に伴い変電所は地元の運動により梅里敬老会館として生まれ変わり、作家の有吉佐和子の小説『恍惚の人』の舞台にもなりました。平成十年、新敬老会館の建設（別の場所）に伴い撤去され、この公園と一緒にになりました。…平成十一年三月 杉並区」と書かれてあるではありませんか。



梅里児童公園
2014年12月5日撮影

こんな身近なところに、小説『恍惚の人』の舞台があったとは驚きです。また、認知症の人を持つ家族の負担がいかに大きいか、この小説を読んでではじめて分かりました。2025年には認知症の人は720万人になると見込まれています。「認知症国家戦略」が、今年の1月27日に決定・発表されましたが、当然のことで

すね。

小説『更紗夫人』では、和田本町の大邸宅が主舞台として出てきます。所有者が変わりましたがその庭が現在も残されていることをお知らせして、筆をおきます。

(文責：広報部 石田國夫 多くの方のご協力により書くことが出来ましたことに深く感謝申し上げます。)